

第 79 回 『わかるように伝えていますか』

式にしてみると

香川大学 坂井 聡

さて、前号で、直方体を示して社会参加するための能力について考えました。このように考えると、社会に参加していくためにはある一定の容積で示される力が必要であるということがわかったと思います。そして、その直方体の容積が一定以上になったとき、その人は確実に社会参加できるようになり、大きければ大きいほど社会参加の質は高くなると考えられるのです。

前号の図を見ながら考えてみます。ここで、社会参加に必要な容積(能力)をKとしましょう。すると、これらの関係は、次のような式にして示すことができます。この式は、本人の能力(X)× 支援とツール(Y)× 周囲の理解(Z)≥K というものになります。ここで重要なのは、本人の能力(X)+支援ツール(Y)+周囲の理解(Z)≥K ではないということです。仮に、本人の能力が非常に大きく、その力だけで十分に社会参加できるようになったと考えられる場合を想像してみましょう。しかし、その人が周囲の人たちから理解されていないとしたらどうなるのでしょうか。いくら本人に能力があったとしても、社会参加することはできないのではないのでしょうか。同様に、周囲の理解がいくらあったとしても本人の力が0であれば、社会参加をすることはできないことなのです。

つまり、いずれの数値も0であってはならないということがここで大切なことなのです。

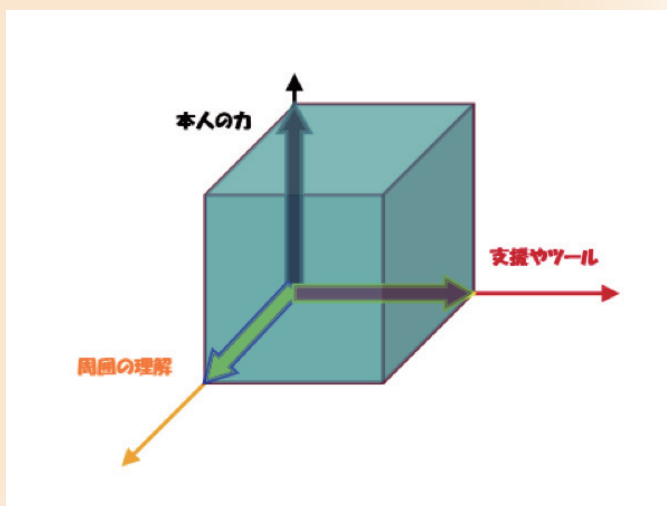
この容積を一定容量以上に保つことができるならば、障がいの有無に関わらず、誰もが生活の質を一定以上に保つことができると考えられるのです。では、そのためには何をすればよいのでしょうか。式から考えれば簡単です。つまり、本人の力が小さいのであれば、支援の方向を広げ環境を整えることによって、底面積を広げることで、本人の力が小さくても容積を一定以上に保つことが可能になるということなのです。

この考え方は、本人の力を伸ばすことを放棄するというものではありません。今持っている力で社会参加することができるようにするために、このような方略を考えるということなのです。

もちろん、本人の力が伸びてくるに従って、支援やツールの使い方も変わってくるでしょう。

周囲の理解も変わってくると考えられます。

本人の実態によって矢印の大きさも変わってくるということなのです。



坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション (やまびこの里) クラスルームコミュニケーション (こころリース出版会) 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア (エンパワメント研究所) など